

---

# 雷炎を纏いし者

神龍白夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雷炎を纏いし者

### 【Nコード】

N0811M

### 【作者名】

神龍白夜

### 【あらすじ】

特SSSランクの強さを持つ少年、真田幸村はいつも道理任務をおえ、帰ろうとするが、そこには銅鏡があり、光に覆われたと思ったら恋姫の世界に！？かなりチートな彼が引き起こす物語の開幕

## プロローグ（前書き）

初めての投稿ですのでよろしくお願いします。

## プロローグ

「・・・・・・・・・・」

澄み切った空の下、15歳程の少年は立っていた。

「今日も空が綺麗だ」

空に向かい、手を伸ばす。

彼の名は真田幸村、特SSSランクの強さを持つこの世界でたった一人の逸材だ。

幼い頃に『天賦の才』を見い出され、この世に存在するあらゆる武術を叩き込まれた。

赤をベースに金色で刺繍された六文龍銭が付いているマントを侍る。服とズボンは赤と黒を強調した中華服のようなものでポリエステルのため日光を反射して輝いている。

「幸村」

「また依頼ですか？」

「うむ、今回は中国に行つてこの資料に載っている奴の暗殺が依頼だ」

「たく俺は何でも屋じゃねえんだぞ！」

「なんかいったか？」

「何にもいつてねえよ」

「まあ良いだろう、さっさと行くんだな」

「チツ……」

地面に突き刺していた愛槍『りゅうせん龍閃』を抜き取り、歩き出す。

ライニングロウド  
「雷の道標」

幸村は身体に雷を纏い、勢いよく踏み込む。  
すると、地面が抉れ超高速で幸村は駆けていった。

- - - - -

「やっと付いた」

あれから、船に乗り中国にやってきた幸村は早速仕事につつま。

「まず、最初は……」

渡された書類には計5人の名前と写真等が写されていた。  
夜の闇に紛れて着実に任務をこなす。

（ああくそつめんどくせえなあ）

ザシュッ!!

「まてっ！頼む助けてくれ！金ならいくらでも用意する!!」

「……………」

ドスッ！！

「ぐええ！！！」

「これで、最後か・・・」

写真に印を付ける。

「うん？」

（こんなところに銅鏡なんかあったけ？）

ピシッ！

うおっ！なんかヒビ入った！

ちょ、なんか光りだしたんですけど・・・だんだん強くなってええええええええ！！！！！！

光が収束したときには幸村の姿はどこにもなかった。

## プロローグ（後書き）

どうでしたか？

コメントをよろしくお願いします。

来ちゃいました異世界（前書き）

二作目ですw



## 来ちゃいました異世界

ビュオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

．．．．．うん落ちてるね、俺ww

「ってわああああ！！！！落ちてる！落ちてるよ俺！！」

グングンと風を切りながら落ちていく。

「やべえ．．．．．ってあるじゃん助かる方法！！」

忘れてたぜ、よくあることだよな大切なときにど忘れするのって

「『偉大なる光羽』グランド・ライウィング」

幸村が口に出すと背中の中の辺りが光だし羽が出てくる。

バサバサ！！

「ふうゝこれで大丈夫だな」

「うん？ちよつと待て．．．．．なんか見えてきた．．．．．屋根？で  
かいなつて城！？」

羽を広げるのが遅すぎて屋根に激突して破壊しながら落ちていく

「イテッ！イタッ！！木が木片が刺さるゝ！！」

「うつうつ!!ハッア!!!」

幸村は身体に雷を纏い当たってくる木などを一瞬で塵とcas。

ドンッ!!!

「ツ~~~~やつと抜けた」

最後の壁を突きぬけ広場みたいなところに出たところで再び羽を羽ばたかせ地に下りていく。

「つと……あれ?ここは?」

羽を消し辺りを見渡すと褐色の美人のお姉さん達とその周りで剣を抜いて構えている女性これまた美人がこちらを睨んでいた。

- - - - -

「- - - - はいこれが最後です。」

玉座の間に響く澄み切った声。

「紅蓮様?聞いておられますか??」

紅蓮と呼ばれた褐色の女性は此处、建業の江東の太守『孫堅文台』  
と言つ。

「聞いているぜ冥琳、だから耳元で大声だすな」

冥琳と呼ばれた女性は『周喻』この孫呉の大都督である。

「まだ終わんないの〜?」

「こら策殿、いまは朝議中ですよ」

「祭はそう言うけど実はめんどくさいんでしょ?」

「雪蓮姉さま!!」

「なによ〜蓮華まで〜」

祭と言われた女性は『黄蓋』宿将として名を馳せている。

雪蓮と呼ばれた女性は、紅蓮の娘で長女の『孫策』という。

蓮華と呼ばれた女性は雪蓮と同じく紅蓮の娘で次女の『孫権』と言う。

この部屋には他にも穩こと『陸遜』亜シエこと『呂蒙』思春こと『甘寧』明命こと『周泰』小蓮こと『孫尚香』がいる。

ドゴンッ!!!!ガガガガッ!!!!

「なんだ!?!」

全員が臨戦体勢をとる。

「母さん!」

「分かっている!上からだ!皆気をつけな!」

ドンッ！！！！！

「ハッハッはっ？」

天井を突き破って出てきたのは輝く羽を広げ体に雷を纏った男だった。

- - - - -

えーと俺は今大変な事になっているのか？

なんか椅子の前で立ってる人なんかお偉いさんばいし……

「あ、あの〜」

わお俺の声で我に返った美人の女性達が殺気を放ってきましたよ！！

「貴様何者だ！」

釣り目の女の子が聞いてくる。

だけど初対面の人に対して失礼じゃないかな？

「人に名を尋ねる時はまず自分から名乗るほうが礼儀だろう？」

「キサマツ！！」

湾曲した刀を逆手に持ち斬りかかってくる。

「本当に礼儀がなっていないな……」

だけど剣を向けるって事は………

「死ぬ覚悟はできてんだろっなあ？」

瞬間、幸村の身体から殺気・覇気が溢れ出す。

「出でよ我が剣『龍閃』！！」

幸村の左手から光が溢れ出しどんどん槍の形になり、最後に大きく光ると幸村の手には雷と炎を纏った槍が握られていた。

来ちゃいました異世界（後書き）

異ルートで行きたいと思いますww

来ちゃいました異世界 中篇（前書き）

ふ  
ふ  
ふ

## 来ちゃいました異世界 中篇

「なっ！」

今どこから、槍をだした！？

「さあ始めようか……」

雷炎を纏いし槍を構える

「グッ！」

その瞬間、思春に禍々しい殺気が襲い掛かる

「そっちから来ないのだったらこっちからいくぞっ！」

ダンッ！！

幸村は地面を大きく蹴り、間合いを詰める。

シュッ！！

ガキャン！！！！

「ぐううう！！！！」

今を受け止めるんだ……できるな

「今を受け止めたこと褒めてあげるよ……だけど次はどうかな？」



バイバチッ！！！！

「フッ！！」

シュシュシュッ！！！！

「なあ！！」

ガキヤンガキンッ！！！！

思春は手から得物が飛ばされる。

ビュンッ！！

「ッ！！」

頸もとにしっかりと槍の矛先を向ける。

「終わりだ・・・・・・・・」

幸村が思春の頸を切り落とそうとすると

「まてっ！！！！！！」

響き渡る声

「我が名は孫文台！孫呉の王なり！」

その名を聞いて幸村は驚愕する。

確か俺の知ってる孫堅っておとこだったよな？

「あ”あ！？」

とりあえず威嚇してみる

「槍を収めてくれんか？そいつは私の大事な仲間であり、家族なんだ」

『家族』と言う言葉に幸村は反応し、槍を消す。

「チツ……………すまないな、怪我してないか？」

幸村は屍餅をついている思春へ手を伸ばす

「あ、ああ……………／＼／＼（なんだこの胸の高鳴りは）」

その手を思春はとり立ち上がる。

「感謝する。」

孫堅はそう言つと幸村の方へと歩いていく

「か、母様危険です！！」

「紅蓮様っ！」

「母さん！！」

「堅殿！」

孫堅の家臣達が引き止めているのにもかかわらずズンズンと近づいてくる。

そして幸村の前まで来るとその瞳を見つめる

「一つ聞くがお前は何者だ？」

何者だと言われましても……

「俺の名は真田幸村、出身は日本おそらく俺はこの世界の住人じゃない。」

てか、孫堅って超美人なんですけど！

「姓が真、名が田、字が幸村か？」

「いや、姓が真田、名が幸村だ。この世界で言う字はない」

「うむ、じゃあさっき言ってた『この世界の住人じゃない』ってのはどういうことだ？」

「ああ、今は後漢王朝で皇帝は劉宏様であってるよな？」

「なにを当たり前のことをいつてるんだ？」

「ありがと、要するに俺は今から1800年も未来からここに来たって事だ。」

「未来から？」

あちゃ／＼是は信じてないな、まあそれが普通だけど

「まあ信じるか信じないかは君しただけだね、孫堅様（ニコ）」

見たもの誰もが惚れそうな笑顔を向ける。

「ツ！／＼しよ、証拠なんぞはないのか！？」

顔が赤いけどまあいいか

「まあ証拠までとはいえないかも知れないけど呉に仕えている武将をある程度は言えるよ」

「ほう・・・それは本当だな」

すると今までこちらを睨んでいた黒髪の女性と桃色の髪の女性がこちらに寄ってくる。ただし、警戒は解いていない

「期待しないでくれよ？まずは、孫堅の娘？かな孫策に孫権、孫尚香、武將の黄蓋、甘寧、周泰、軍師の周瑜、陸遜、呂蒙まだまだ言えるけど主な武將はこのくらいかな？」

幸村が言い終え孫堅たちを見ると全員が驚愕の色に顔を染めていた

来ちゃいました異世界 中篇（後書き）

コメントよろしく願います!!

来ちゃいました異世界 後編（前書き）

久しぶりの更新

長らくお待ちさせてすみません！

## 来ちゃいました異世界 後編

「え」と

何か悪い事でも言っただかな？  
なんか皆黙ってるけど……

「本当に天の御遣いらしいな」

天の御遣い？

「その天の御遣いってなんだ？」

「知らんのか？今民の間で有名な話じゃ……黒天を切り裂いて天より飛来する一筋の流星。そして流星は天の御遣いを乗せ乱世を鎮静す。とな」

「俺、そんなたいそうなもんじゃねえぞ？」

しかも俺は殺し屋だしな

「しっかしなんで俺はタイムスリップしてきたんだ？……」

やはり、あの銅鏡が原因だよ……それしか考え切れん。

「たいむすいっぷ？なんだいそれは？」

「たいむすいっぷじゃなくてタイムスリップね。今さっきも行ったとおり1800年も未来から来たんだよ。」

「紅蓮様。」

「分かつてる。なあ真田殿」

「あん？」

「家族は？」

「うんなもん最初からいねえよ」

「すまない。……寝どころは？」

「そこら辺でも寝れる」

「食は？」

「山と川で狩る」

「行く宛ては？」

「ないな……だがブラブラするのもまたいいな」

うん。今考えると何も無いな。

まあ向こうの世界でも同じだったけどさ

「ならワッチ達の所に来ないかい？」

「母さま!？」



「母さん!？」

「ふむ、なるほどのう」

「天の御遣いかも知れない俺が君達の仲間になるだけで、民からの支持が上がり、名を広める事が出来るからか？」

俺が言うと、冥琳と呼ばれていた女性が驚いた表情をするが直に笑みに変わり、

「ほうよく分かったな・・・どうやら武だけでなく智もあるようだ。」

「

で、どうだい？ワッチ達の仲間になりやせんのかい？」

そうだなあゝ、行く宛ても決まっていなしい・・・字は読めるだろうけど金もないただブラブラしてるってのも嫌だし・・・  
まあいいか。

一番安全だろうしね。

「分かった。俺は君達の仲間になるよ。分からないこともあるだろうけど宜しく頼む。」

こうして俺のこの世界での人生が始まった。

来ちゃいました異世界 後編（後書き）

孫堅の口調を変えました^^

感想などがあればじゃんじゃん送ってくださいね^^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0811m/>

---

雷炎を纏いし者

2011年1月12日10時34分発行